

優秀賞

音楽のよひに、絵のよひに

神奈川県 森村学園初等部六年 小間 詩子

私は、九月のピアノ発表会で、ショパン作曲の幻想即興曲を演奏しました。四方からのスポットライトの下、観客の視線に私のこ動は、激しく鳴り打っていました。しかし、私は深呼吸をし、ある一人の画家を想い、演奏しました。

その画家、それは、フィンセント・ファン・ゴッホでした。彼は私の本番の演奏の時まで、いつも心のどこかで私を見守ってくれました。

私がゴッホに興味を持ったのは、『ゴッホ最期の手紙』という映画を観た事がきっかけです。その映画は、現代の百人以上の画家達が、ゴッホの作品を基にかいた、六万枚もの油絵をつなぎ合わせて作られたアニメーションでした。つまり、ゴッホの油絵が動き出すのです。そして、その映画から、私はゴッホの生き様を知ったのです。

彼は、画家になった二十七才から三十七才で生涯

をとじるまで、八百点もの油絵をえがきました。しかし、ゴッホの生前に売れたのは、たったの一点でした。その事実を知った時、私はショックが胸につきささりました。今では、多くの人に彼の作品は愛されていますが、かつてのゴッホは、彼の純粋いさゆえか、だれにも認められず、いじめられ、こ独に生きていたのです。しかし、それでも彼は、見たものを感じた通りに、のびのびと絵に表現し続けました。

私はピアノの練習で、何度も自分の心と向き合いました。手が痛くても、しっぶをはって毎日練習をしているのに、上達を全く感じられない時期もありました。すると私は、心の底から、努力に裏切られたような気持ちになりました。自分のはやって来た事が無意味なのかと悲しくなり、自分にはこの曲は無理なのではないかと、自信を失ってしまう時もあり

ました。

そんな時、ゴッホが私の頭の中に現れました。それは、たとえ絵が売れなくても、雨の中であろうとも、キャンバスに向かって夢中で大好きな絵をかき続けるゴッホの姿でした。そして、私も、自分がピアノが大好きなのだ、改めて気付いたので。大好きなピアノに、深く思いをこめて、私らしく演奏したいと感じました。そして、私はあきらめずに、また練習を続けました。

むかえた本番、私は、この曲に、ゴッホの報われぬ日々への悲しみ・苦しみと共に、彼が作品に残してくれた美しい光を表現し、ピアノをひきました。演奏の終わった後、観客の中に私の演奏にのみだを流して感激してくれた人がいる事を知りました。私はその事が忘れられません。

「私は絵の中で音楽のように何か心なぐさめるものを表現したい。」

とゴッホは言っています。私は、ピアノで、ゴッホの絵の中の光や彩りのような何かを、聞く人の心にひびかせたいと感じます。

